

二次元パチ文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

淫霧の魔館

千夜詠

表紙イラスト／なえなえ



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『淫霧の魔館』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



淫霧の魔館

千夜詠

表紙イラスト／なえなえ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

かほういん

華奉院アリエル

透けるような白い肌と輝くブロンドの美少女。幼げな容姿と不釣り合いな妖艶な気配を漂わせ、赤也を性的に弄ぶ。その目的は不明。

もろくあかや

諸句赤也

変化のない日常に飽き飽きしている、なんの変哲もない青年。不気味な洋館で出会った少女に魅了され、付き人として住み込みで働くことになる。

こんなはずじゃなかった。そんなふうに思いながら溜め息をついている人間が、この日本にいったいどれだけいるのだろうか。

諸君赤也という青年も、そんな一人だったろう。

酷く退屈だった。

「よう、諸君、これから一杯どうだ。家に帰っても、何もすることないんだろ？」

決めつけられる言い方が気に入らない。ただ実際、家に戻っても新しい予定なんてなかった。

「いえ、自分は、これからちよつと……」

「なんだ、デートでもあるのか？　ちつ、しゃあねえな」

これでいい。どうせ飲みに行くと言っても、若作りしたおばさんが女将をする居酒屋なのだ。三十近く歳の離れた先輩に付き合われて、愚痴や説教に愛想笑いで応えるのも飽きている。最初の頃は、これも社会人には必要と割り切ったりもしたが、今では、出世の肥やしにもなりはしないと冷めていた。

いかにも意味深な口調で断って、勝手に勘違いさせておこう。

定時から一時間ほど遅くにタイムカードを押して、小さなベアリング工場の事務所から駐車場に向かう。辺りは、すっかり暗くなっていた。

ここから車で四十分ほどかけて家に帰る。いつものように。

一年半ほど前、赤也は一人暮らしをしていた都会の学校を卒業して、実家のあるこの田舎町に戻ってきた。本当はきらびやかでコンクリート臭い都会で仕事を見つけたかったが、この就職難にやっと採用が決まったのが今の職場だけだった。

それでも初めは、職の見つかった安堵から、概ね満足していたものだが、仕事に慣れてくると、日常は急速に灰色に変わってくる。毎日同じことの繰り返しに、つまるところ、退屈していた。

田舎は車がないと満足に移動もできない。三年ローンで購入した白い中古の軽自動車のエンジンをかけながら、これからどう過そうかと考える。

ネットでアダルトサイトでも見ようか？ それとも、昨晚とりあえず録画しておいた洋画でも鑑賞するか？ それほど楽しみにしていたわけでもなかった。

その場限りに楽しくやってきた学生時代と違って、無趣味は辛い。地元の友人がいなかったわけでもないが、それ以外は皆、この田舎から出て行ってしまっていた。

自分のつまらなさに自虐する。

車は国道から県道に入ったが、実は結構混雑するものだ。同じような時間帯に仕事を終えた者達が、集中してしまう。

「ち……っ」

分かっていたことだが、舌打ちをする。

もつとも、早く帰りついたからといって、やりたいことの一つもないのだが。

それでも、渋滞は人を苛立たせる。

特に今夜は、事故でもあったのか、やけに車の進みが悪かった。信号待ちした交差点から前を見ると、進むべき方向には、まだ車のライトが列をなしている。このままでは信号が青に変わっても、十字路の真ん中で停車することになってしまいうだろう。

うんざりしながら溜め息の一つも発したその時だった。

一匹の黒猫がボンネットに飛び乗ってきた。

「うわっ！」

青白く光る猫の瞳がこちらを見詰める。まるでほくそ笑むように一声鳴いて、そいつは走り去っていった。

なんだったんだ。びっくりさせやがって。毒づきながら、猫の去っていったほうを向くと、そちらは普段は走ったことのない道だった。

確か、地図上では、家に向かう迂回路になるはず。

毎日、同じコースを走るのも飽き飽きしていたところだ。カーナビはない。だが、方向感覚には自信があった。いざとなったら、民家にも尋ねにいけばいい。少々迷ったとしても、どうせ急ぐ用事もないのだ。

ウィンカーをつけた。

いつものコースを逸れて、十分ほど走ると、急な山道に差し掛かる。構わず登るが、本当にこの道でいいのか不安になって、途中で家のある方角に向かう更に細い道に入り込んだ。

これが良くなかった。周囲は森の中のようで、灯りはヘッドライトだけ。舗装されていない土の道の振動に体が何度も大きく揺さぶられる。

更に十分ほど走ると、霧が濃くなってきた。不気味な静けさに、カーラジオをつけるが、どうも上手く受信してくれない。

引き返すか？ そう思い始めたその時、エンジンから鈍い音がして——なんだ？——止まってしまった。

「畜生っ！ よりによって、こんな場所で……」

ついていけない。ハンドルに腕を叩きつけようとしたが、無意味な行動と思いとどまった。とにかく原因を探ろうと試みる。

ガソリンはまだ十分にあった。外に出て、開けたボンネットの中を覗いてみるが、暗くてよく分からなかった。

更に霧が濃くなってくる。ジメジメしてシャツがやけに湿って重くなってきた。

携帯は——繋がらなかった。

打つ手なしだよ。ここは既に霊界の入り口なのではと思えるほどの不気味な暗闇の森の

中。何か引き摺り込まれそうな不安が湧いて、一度車の中に戻った。

諦めて、ここで一晚過ごすか？ 古い車だ。明るくなってきたら、エンジンルームをもう一度覗いてみることにしよう。案外、簡単に直るかもしれない。

バッテリーを気にして、ヘッドライトを切る。

すると、北の方角に淡い光が燈っているのが分かった。

「民家……か？」

移動はしていない様子である。ならば助けを求めることができるかもしれない。

再び車から降りて、滑りやすそうな足元を気にしながらそちらに向かった。

繁みを無理やり越えながら、よく見えない前を気にして進むと、意外と近くにその光の源はあった。

想像だにしていなかった建物であり、だが、この深い霧の森にまた見事にはまっていたと言っている。

黒い外壁をした洋館だった。窓から漏れる灯りからすると三階建であろうか。中世の欧州にでも迷い込んだかのような気分陥りそうなくらいには古そうだ。建物の規模から察するに、少なくとも小学校くらいの敷地はありそうだが、ひよつとするとこの辺りの山もこの家の土地という可能性もある。

しばらくボーと眺めてしまっていたが、目的を忘れてはいけない。

更に近づくと、鉄格子の囲いがあつて、それを伝いながら、玄関を目指した。

「しかし、こんなところに、こんな立派な豪邸があつたなんて……」

噂にも聞いたことがないが、元々地元の事情に興味がなかつた赤也だ。単に自分が知らないだけだつたと納得する。

足元が悪いせいもあつてか、なかなか正面どころか裏口にさえ辿り着けない。せめてこの館の人が気付いてくれれば、そう思い始めた頃、

パシャ……。水の跳ねるような音がした。

霧が晴れてきて、鉄格子の向こう側の様子がはっきりと見えるようになってきた。

そこはどうやらこの館のプールのように、誰かが泳いでいるのだと分かつた。

大した豪邸に、優雅な生活をしている人間もやっぱりいるものだ。そんな感心をしながら、この人ならば、さっそく声を掛けて見ようと張り上げようとした時だつた。

雲が逸れて、月明かりが差し込む水面から、彼女はサイドへと上がってくる。小柄な女の子。不意に声を掛けたら怖がらせてしまふかと躊躇したが、次の瞬間には驚愕を漏らしそうになつて、慌てて口元を押さえた。

全身から水を滴らせる少女は、何も身につけていなかったのだ。

心臓の鼓動が激しく高鳴つて、繁みの中に身を潜めてしまふ。驚きの後に、湧き上がった言葉は——美しい——。

あどけないと表現できる顔に、気の強そうな大きな紫色をした瞳。濡れた金髪は長く、僅かな癖だけの、ほぼストレートなのだろう。

遠目だが、まだ成長途上にあるように思える体つきだ。華奢でしなやかな手足に、指の先端までが何処か高貴に感じる。

赤也は豊満なタイプの女性が好みであったが、この時ばかりは見蕩れた。いや、興奮したといったほうが正解である。

か細いが、痩せぎすな印象はなかった。曲線だけで描かれたような女の子の肉体では、下底ほど膨らんだ臀部の形状は既に扇情的な女そのもの。三角錐のような小さな胸の膨らみは、まだ乳房とは呼べぬような代物であったが、健気な成長し始めを印象づけ、それがかえって性を強く意識させてくる。冷たい水にあてられたせいかわ、薄桃色の乳首がツンと勃っていた。

紛れもなく、これまで出会った中でも、群を抜いた美少女である。水濡れた肢体が月明かりに煌き、赤也はその幻想的な姿に呟いた。

「ウンディーネ……」

水の妖精の裸体に、青年の呼吸は深く荒く乱れてくる。息を潜めて、血走った瞳を向けてしまっていた。勃起していた。

少女は直ぐには館のほうへは戻らず、プールサイドを全裸のまま歩いていた。体重を感

じさせないような軽い足取りで、踊っているかのように。

ごくりと唾を飲み込んで、片時も逸らすことなく彼女を視線で追った。

その華奢で小柄なのに、全身から牝が匂い立つような裸体がこちら側に正面を向けると、女の子を確実に示す部分が見えてしまう。

「お……っ、おお……」

深く切れ込んだ縦スジが背徳的に男をそそつてきた。恥毛は見当たらず、ワレメの存在が直接牝の本能を刺激するように剥き出されている。下腹部の水滴が妙な想像を掻きたて、肉裂に吸い込まれるように落ちていく様子さえ見えそうに思えた。

ハア、ハア、ハア……。覗き見る罪悪感など、興奮が覆いつくしていた。

ここにやってきた目的も忘れて、ファスナーを下ろして、硬直しきった肉棒を取り出していく。それはもう脈動を繰り返し、先端から大量にカウパーを滲み出していた。

激しく扱きたてたのは言うまでもない。

*

欲求を放った途端、急に怖くなって逃げるようにその場を離れた。

不思議なことだが、車に戻ると、エンジンはあつさりと動きだし、とにかく走らせると簡単によく知った県道に出る。

時間にして二時間ほどのロスで自宅に帰りついたのは意外だった。

俺には、ああいう小さい少女に劣情を抱く性癖があつたのだろうか？ 寝しなに考え、それによって自分を侮蔑することもなく、ただ欲求が募っていく。その夜、もう一度、自身を慰めた。

次の日になつて、帰り際、もう一度あの場所へと車を走らせていた。

都合よく彼女がまた裸でプールに入っている保証はなかつたが、淡い期待に鼓動は高鳴っていく。

昨晩はあれほど迷つたのに、案外短い時間で到達する。

この森は酷く不気味だつた。先祖からの遺伝子に刻まれた恐怖の記憶が呼び覚まされるような気分させられる。

それでも、彼女の美しく妖しい裸体に惹き寄せられてしまふ。

昨晩は気付かなかつたが、通つたのは獣道のようなうだ。そのまま伝っていくだけで、あのプールの端に到着する。

もう、呼吸が興奮に乱れていた。

昨日と同じ場所から、覗きを開始すると、プールの中は静まり返っている。

落胆を覚えた。だが、考えてみれば、昨晩よりも早い時間で、そのまま息を潜めて待つことにした。

来た。

つい再び手に取ってしまい、誰も見ていないと思ってしまうと、その柔らかな薄布を頬に当てていた。

まだアリエルの温もりが残っていて、甘酸っぱい残り香が鼻腔に届いてくる。

「ハア、ハア、アリエルお嬢様あ……」

とうとう鼻に押し当ててしまうと、思い切り吸い込んで、臭いを嗅いでしまう。それだけで肉棒がビクビクと脈動を繰り返した。

窮屈すぎるズボン。ファスナーを下ろすだけでは物足りなくて、下着まで一気に脱いだ。

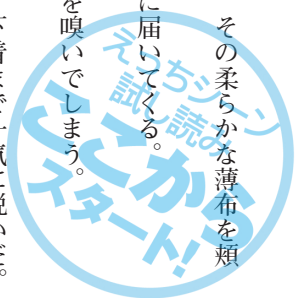
「あ、ああつ、お嬢様の……パイパンマ○コの臭い……。お、おお……」

だからだと止めどなくカウパーが鈴口から流れ出ていく。それがどれほど異常な量かと考えることもなく、強い興奮のままクンクンと鼻を鳴らし、そして舌を伸ばしてしまった。ぺちや、クロッチの内側を舐めると痺れるような感覚が湧いて、性感すら生じてくるようだ。赤也にとってこの下着はお嬢様そのもので、愛でる気持ちと邪まな感情を注いでしまう。

純白のショーツに唾液の染みをつけながら、ここには彼女のいやらしい滲みが下りてきたのかと味わった。お尻に食い込んでいた紐に鼻を当てて、独特の粘膜の香りを探る。

「ほあ、お嬢様のケツの香り……、やべえ、俺……変態……」

「ほんと、変態ね、赤也は」



陶醉していて気づかなかった。

見上げるとお嬢様が裸のまま細めた瞳でこちらを見詰めながら立っている。

「お、お嬢……様……」

頭が真っ白になって、言い訳のしようもなく、顔を蒼白とさせた。それでも肉棒は硬直しきって脈動を繰り返している。

「赤也の様子が気になって、後戻りしてみれば……。ふう、そろそろ限界だったかしら。余り溜め込ませすぎても、計画に支障がでるわ」

アリエルが何を言っているか理解に苦しむが、今はこの状況をどうやって乗り切るかが、問題だ。執事の話では、既に前の職場の辞表は受理されて、職を失うのは避けたい。なによりもお嬢様の傍にいられなくなるのは嫌だった。

「も、申し訳ありません。つい、出来心で……」

土下座した。下半身を露出させたみっともない格好のまま。

「つい？ 本当かしら？ まあ、いいわ、許してあげる」

「え！」

「許すと言っているのよ。お前が私にどんな劣情を抱いているかくらい知っているつもりだし、そうでなくては意味がないわ。今の私に一番発情してくれる男を選んだのだものね」

「………どういう………？」

「この段階で触れていいのは……足でいいかしら」

顔を上げて、意味が分からないといった表情をしていると、

「踏んであげるのよ。そういうのは嫌い？」

呆けたようになって、首を横に振った。

「そう、じゃあ、仰向けに寝なさい」

言われるままにする。令嬢の雰囲気のまま全裸で立っているお嬢様を見上げた赤也の顔は歪んだ恋心を抱いた変質者そのものになっていた。お嬢様が近づきやすいように、股を開く。

「赤也のチンポ、昨晚見た時よりも、腫れあがっているわね。そのうえ、汚らしい汁でベトベトになってるじゃない。どう、私みたいな小さな女の子に見下ろされる気分は？」

「そ、それは……、わ、悪い気分ではありま、うっ！」

赤也の脚の間に入り込んだアリエルが、片足を彼の睾丸から肉棒の根元辺りを踏み込んできた。

程よい圧迫に、青年はもう涎を漏らしそうになってしまう。痛みとなるこの直前の感覚は完全に性感だった。

「いい気分の間違いでしょ。こんなにチンポ膨らませているんだから。お前の臭くてべちよべちよと汚いのを私の高貴な足で踏んであげているのだから、それはもう無上の悦びな

「のでしょ？」

グリ、グリつ、と時折力が込められる。お嬢様の足裏は、角質のざらつきを殆ど感じる
ことなく、そこまで滑々すべすべしている極上物だった。

「は、はい……。お嬢様の愛らしく、美しいおみ足が、お、俺の、醜いのを踏んでくださ
るう……。ああ、お嬢様を汚してしまう」

「ふふ、いい心構えで嬉しいわ。初日なのに、赤也は見込みあるわね」

「あ、ありがとうございます。うっ！」

カウパターの滑りに任せて、小さな足が焦らすかのように亀頭のほうまで摩ってくる。

「変態の見込みが十分って言うているのよ。それでも嬉しい？」

「お嬢様に触れていたただけるなら……。ハア、ハア……」

足先の指が広げられて、カリ首が微かに挟まれる。真つ白なお嬢様の足裏はカウパーに
ぬるぬると塗れていた。

くちや、ズズつ、ずちゅつ、ずちゅ……。つ。

「踏まれて嬉しいって、正直に言いなさいよ。あら、お前、ずっと私の成長前の小さなオ
ッパイや、未発達なワレメばかり見てるわね。こういうのが好きなのでしょ？」

腰の両方に手の甲を当てる格好で、からかいと蔑みの中に、少しだけ慈愛を混ぜたよう
な瞳のリエルは嬉しそうに青年を眺めている。

「お、お嬢様だから……、他の女の子には、こんな……。ああ、も、もっと……」

つい欲求を口走ってしまうと、優しいお嬢様は強く踏みつけてくれる。

グリっ、ぐっ、ぢゅずっ、ぬちゅっ……。

「嬉しいことを言ってくれるじゃない。でも、お前が変態なのは変わりないわね。ほら、踏まれながら、チンポが嬉しそうにビクビクしてる」

カリ首を擦りつける足先の動きが早くなった。

「お、お嬢様っ、お、俺……も、もう……」

口角を上げる小悪魔の微笑みが見える。

「まったく、付き人のお前が、ご主人様である私に奉仕させるなんて、恥知らずの上に、身の程知らずのド変態ね、赤也は」

小柄な体重が掛けられ、肉棒への圧迫がきつくなった。それは膣が締めつけられるのと同じように、射精を促す刺激となる。

「おほおっ、出る！ 出てしまいます、お嬢様あつ！」

「いいわ、出しちゃいなさい。華奉院アリエルが許可するから、大量にぶちまけなさい」
ぐちゅっ、ズズズっ！ ぐりゅぐりゅっ……う！

遠慮なしに、足で苛烈に扱かれて、脳内に痺れる甘い悦が広がっていく。何度も身に覚えのある強い衝動が膨らみきつてきた。

「ふあつ、お嬢様あつ、お嬢様あ——っ！」

ドブツ！ ドピュルルツツ、ドブドブドブ！

セックスの時でも感じたことのないエクスタシーに包まれ、これまたありえないほどの大量のザーメンが吹き出していく。

「お、おお……、ま、まだ……出る……」

お嬢様の足の下で痙攣を続ける肉棒は、萎える気配もなく、いつもなら一瞬の射精感がいつまでも治まらなかつた。

ビュクッ、ピュルピュルッ！ 自分の顔にまで降りかかるように飛び散ったザーメンは、胸元から腹部に到り、そこから床に垂れ落ちていく。

アリエルの足先にも幾分か纏わりついてしまったようだ。

「うふふ、すつごい……。赤也ったら、昨日も出してるのに、こんなに沢山……」

尋常ではない。明らかな異常であつたが、その強すぎるような快感に、涎漏らしながら呆けるだけの青年。

頬を赤らめたお嬢様が、とても嬉しそうにしているのが幸せに思えた。

しばらく微睡の中のような気分だったが、いつまでもこのままではいられない。

「いいわ、そのまままだ横たわっていなさい」

お嬢様は脱衣場にあつた椅子に座ると、メイドの一人を呼んだ。

赤也は命じられたまま、じっとしている。

一礼して入ってきたメイドは、紅い癖のある髪を肩まで伸ばした大人っぽい雰囲気を持っていた。シンプルな黒のワンピースタイプのメイド服に、白いエプロンをしていたが、豊満な肉体をしているのは分かった。

歳は二十代の中頃といった感じで、一般的に見て美人である。赤也の好みは、元々はこういった肉感的なタイプであったが、今はまったく興味を覚えない。

「サラ、集めてちょうだい」

「はい、畏まりました」

淡々と返事をして、サラは持ってきた硝子瓶を取り出しながら、赤也の脇に膝をつけた。強烈に蔑むような瞳が一瞬、下半身を丸出しに、肉棒もまだ硬直したままの青年に向けられる。そしてゴム手袋を装着して、ザーメンをかき集めだした。

「うわ、きつたない。何で、私が、こんな変態の……。キモ……」

なんて女だ。お嬢様はあの高貴で美しい足で直接踏んでくれたのだぞ。それなのに、この牝豚ババアは、そんな汚物を見るように俺を扱ってくる。あからさまに嫌そうな顔をしゃがんで。

「こちらには取り終わりました。……お嬢様、足に……」

赤也から離れたメイドのサラは、アリエルに近づくと、椅子に座った彼女の前で傳いた。

お嬢様の足についたザーメンを取ろうと手を伸ばすが、ゴム手袋も既に精液に塗れている。不意に頬を桜色に染めて、メイドは顔を小さな令嬢の足に近づけ、舌を伸ばし、パシッ！ アリエルがサラを叩いた。

「何をしてるの？ 赤也のザーメンは全て私の物なんだから。お前のような下賤の者が口にしていいものではないわ」

ああ、お嬢様！ すかっとすると同時に、もう完全にお嬢様の虜になってしまう。そうだ。俺の全てはアリエル様の物なのだ。

憧れと愛情と劣情の掻き回された視線を美しき裸体を見せる令嬢に向けながら、何故、手で触るのも嫌がったメイドが唇を寄せたかままで考えない赤也だった。

*

一週間ほど過ぎて、相変わらずお嬢様は、大胆に刺激を与えてくれる。

彼女の裸体以上に、美しく、可憐で、そして興奮させられるものはこの世に存在しないのかと思わされる。毎日見せられているのに、飽きることはなくて、むしろ、もっと、もっとと欲求が募っていった。

ずっとお嬢様の傍にいて、ろくに休みもなかったが、僅かな休憩時間に彼女の姿が見えないだけで、ソワソワして落ち着かなくなってしまう。

もう、お嬢様なしでは生きていけない。

ここで生活をするにあたって、お嬢様から幾つかの約束をさせられている。勝手にお嬢様の体に触らぬこと。

当然だ。欲求は勿論あったが、時折、お嬢様のほうから足で踏んでくださる。それで満たされていた。

もう一つ、勝手なオナニーの禁止。

自慰そのものがまったく駄目なわけではなかったが、行く時は、お嬢様の見ている前でなくてはならなかった。我慢を重ねて、切なさが募ることはしよつちゅうであったが、未だ自慰を懇願することはなかった。時間の問題かもしれないが。

ここへやってきて幾度目かの朝がやってきた。

目覚ましなどはなかったが、体が覚えている。お嬢様が起きられる前に準備しなくてはならない。

汗を含んだシャツを脱いで、着替えようとしたその時、膨らんだままの股間が瞳に飛び込んでくる。

そういえば、この館でお嬢様に会った時から、ずっと勃起したままだ。普通ではないのだが、些細にしか感じない。

それよりも、

「また、大きく……なった、ような……」

下着を脱いで確かめてみると、天井に先端を向けた肉棒は、ここへやってくる前より、昨日より、明らかに肥大していた。

パンパンに膨らみきつた亀頭は赤黒く光沢して、カリが鋭角に広がっている。より長く、より太くなった肉幹に浮かぶ血管は硬く、ゴツゴツとした縄が巻かれているかのようで、歪で醜悪になっている。

そこにもう一つ心臓があるかのように、脈動が止まらなかつた。

これをお嬢様はうつとりと見詰めてくれるのだ。

ああ、こんなのを、もしお嬢様の小さなワレメに押し込むことができたら——。

ぶるんと頭を振った。

俺は騎士のようにお嬢様に仕えるのだ。自分から穢してしまつてはいけなない。

着替えを済ませて、お嬢様の元へと向かつた。

日中、お嬢様の後ろをついて、歩いていくと、もうズボンが張り裂けそうな股間をメイド達が蔑みと興味本位で見てきた。

「なんなの、アレは……」

「ド変態の欲求そのものね。こつちを見ないで欲しいわ」

「あの男がきてから、館の中が一気にチンポ臭くなつたんじゃない。やだやだ」

なんとでも言え。この股間の膨らみはお前達のような牝豚ババアに向けているものじゃ

ない。これはお嬢様を讃える証なのだ。

アリエルお嬢様がお傍に置いてくださるだけで、他のことなどどうでもいい。短い昼食時間の後、アリエルの方から赤也の部屋にやってきた。

その時のお嬢様の姿は、素肌 directly 黒いコルセットと革のピンヒールブーツだけという格好だった。ささやかな胸の膨らみも、ぴちつと閉じたワレメのスジも丸見えの挑発的な姿に、さっそくビクンビクンと跳ねてしまう。

「お嬢様、このような部屋にどのような御用で……」

「ふふ、この一週間、赤也はよく尽くしてくれたから、プレゼントを用意したのよ」
彼女が後ろを振り返ると、木製の台車のようなものに乗せられた一人の女が運ばれてくる。女と分かったのはそのボディラインが、豊満な乳房に括れた腰周り、大きく肉付きの良い肉感的なものからだ。

全身が黒のラバースーツに包まれ、顔もやはり黒のボンテージ用のラバーマスクをされている。それは頭部全体を覆っていたが、口元だけが開放され、ただそこもボールギャグがなされていた。

四つん這いの格好で、手枷と足枷で拘束されている女。だが、マスクの後ろから背に流れていく紅い髪には見覚えがあった。

俺のザーメンをいかにも汚らしそうに扱ったサラというメイドだ。

「これは……いったい？」

完全に道具扱いされているラバースーツの女を運び込んできた他のメイドらをアリエルは下がらせる。

「ん？ だから、プレゼントよ。お前、いつもあそこをコチコチにしてるもの。本当はこれを……」

お嬢様は自身の鼠蹊部を指差した。

「あげても構わなかったのだけど、儀式までは駄目だつて、エウリノムが五月蠅くつて……。だけど、そろそろ、精液の溜まる量も速さも狂おしいほどでしょ。何時間かおきに抜いても我慢できないほどに……。だから、用意してあげたのよ、お前専用のザーメン便所を」
自身のワレメを指してあげても構わないと言われれば、感動に打ち震えそうだ。

いや、多くを望んではいけない。こんな淫らで美しい素敵なお姿が拝見できるだけで、幸せなのだ。

お嬢様の成す異常な行動にも恐怖の一つもなかった。妖しく、怪しい刺激に既に赤也も狂い始めている。普通でない館の生活や身に降りかかる事象への疑問も僅かであった。

「ザーメン……便所……」

お嬢様がいる前だというのに、興味深く黒に包まれた肉体を見てしまう。光沢したラバの質感のお尻がぷりぷりと扇情的に、くぐもった呻きを漏らしながら、喘いで振られて

いた。

生唾ものだ。それでも、お嬢様の可憐な美しさと、裸体になった際に見せられる性感部の背徳的な淫靡さのコーポレーションからすれば、興奮の度合いは少ない。

「気に入ってくれた、赤也」

「お、お嬢様から頂けるものなら……。ところで、儀式と先程仰いましたが？ まさか、結婚なんて……」

呟くように言ってしまったって蒼白となる。

「も、申し訳ございません。俺のような下賤の者が……」

刹那、きよとんとしたお嬢様だったが、直後、楽しそうに笑った。

「あはは、なるほど、そういう捉え方もあるのね。ふふ、確かに、まあ、契約をして、互いを縛るという意味では、結婚と似たようなものだけど」

それ以上は儀式の話題には触れず、お嬢様はラバー拘束された女の傍に寄った。

「ほら、御覧なさい。ここにファスナーがあるでしょ。これを下ろすと……」

サラらしき物体の股間からお尻の谷間が開かれて、猥褻物が露出する。

「うう……っ！」

呻きを漏らす肉便器。その本体は、紅い恥毛が生い茂り、濡れて土手肉から肉裂の粘膜部に卑猥に張り付いていた。ぐにやぐにやした花卉が淫猥な経験を物語るように食み出し

ていて、合間から淫蜜を滴らせている。肉芽も包皮を完全に捲り上げていて、盛りきつて
いることを伝えてきた。

「あらら、ごめんね、赤也。本当に便器みたいに汚いわ。やっぱり、使われすぎた中古品
より、新品を用意すれば良かったかしら。でも、こいつ、やたら私に近づいてきて、うざ
かったのよ。それに、お前を馬鹿にするくせに、ザーメンだけは欲しがって……」

確かに、本当に赤也が欲するのは、無垢さと牝の混在した甘美なお嬢様のワレメ。座り
込んで、肉便器の女陰を観察している彼女の愛らしくいやらしいお尻から、微かに見えそ
うな無毛の肉裂に彼の視線は注がれていた。

「ちよつと臭いけど、何百本ものチンポからザーメン搾り取ったオマ○コだから、性能は
保証するわ。ねえ、使ってみせてよ、赤也」

「えっ、あ、はい……お嬢様……」

彼女は自分が他の女とセックスすることに何とも思わないのだろうか？ ふと寂しさを
感じていると、

「何をしているの、赤也？ ああ、お前は女くさいのより、私みたいな少女してる方が好み
だったわね。いいわ、じゃあ、こうしましょ」

お嬢様がこちらを向きながら肉便器の背中に馬乗りに座った。ボールギャグから少し嬉
しそうな声が漏れてくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>